

塩原多助旅日記

三遊亭円朝

青空文庫

いや是これは若林先生わかばやしせんせい、さア此方こちらへお這入はいんなさい。どうも久ひさし振ぶりでお目めに掛かりました。裏猿樂町うらざるがくちやう二番地ばんちへ御転住ごてんちゆうになつたといふ事でございませうから、一寸ちよつとお家見舞いへみまひにあがるんですが、どうも何も貴方あなたのお座敷ざしきへ出すやうな話がないので、つい御無沙汰ごぶさた致いたしました。時に斯かういふ話があるんです。是これは貴方あなたも御承知ごしやうちの石切河岸いしきりがしにゐた故人こじん柴田是真翁しばたぜしんをうの処ところへ私わたしが行いつて聞いた話ですが、是これは可笑をかしいて……私が何処どこへ行いつても口馴くちなれてお喋しゃべりをするのは御承知ごしやうちの塩原多助しほばらたすけの伝でんだが、此この多助たすけの伝でんは是ぜ真翁しんをうが教をへてくれたのが初はまりだが、可笑をかしいぢやありませんか。どういふ訳わけかといふと、其頃そのこゝろ私わたしが怪談くわいだんの話はなしの種子たねを調

べようと、思つて、方々へ行つて怪談の種子を買出したと
 云ふのは、私の家に百幅幽霊の掛物があるから、百怪談
 といふものを拵へて話したいと思ふ時分の事で、其頃はまた世
 の中が開けないで、怪談の話の売れる時分だから、種子を探
 して歩いた。或時は是真翁の処へ行くと、是真翁が「お前は
 このごろたいそう怪談の種子を探しておいでなさうだ。」
 「どう
 か怪談の種子を百種買出して見たいと思ひます。八代目団
 十郎や市村羽左衛門の怪談、沢村宗十郎の御殿女中の怪
 わいだん、岩井半四郎の怪談、其他聞いた事見た事を種々
 集めてゐるんですが」と云ふと、是真翁が「円朝さん、妙な
 怪談の種子がある。こりやア面白い怪談だが、お前何

を知らないか、塩原多助といふ本所相生町二丁目炭
 屋の怪談を「知りませぬ」「さうかね、塩原多助といふ
 炭屋の井戸は内井戸であつたさうだが、其家はたいした身代
 だから、何とかいふ名のある結構な石でこしらへた立派な井戸
 ださうだ。ところが其の井戸の中へ嫁が身を投げて死んだり、二
 代目と三代目の主人が氣違ひになつたりしたのが、其家の潰れる
 初まりといふので、そりやア何とも云へない凄い怪談がある」
 「へー、それはどう云ふ筋です」「委しい事は知らないが、何で
 も其の初代の多助といふ人は上州の方から出て来た人で、
 同じ国者が多助を便つて来て、私もお前のやうな大きな身代
 になりたいたい、国の家が潰れたから江戸で稼いで、国の家を再興

したいと思つて出て来たのだから、どうか資本を貸してくれと云ふと、多助がそりやアいけない、他人に資本を借りてやるやうな事では仕方がない、何でも自分で苦しんで蟻が塔を積むやうにボツく身代をこしらへたのでなくては、大きな身代になれるものではないから、兎も角も細かい商ひをして二朱か三朱の裏店へ住つて、一生懸命に稼ぎ、朝は暗い中から商ひに出、日が暮てから帰つて来るやうにし、夜は翌日の買出しに出る支度をし、一時間か一時半ほか寝ないで稼いで、金を貯めなければ、ほんたうに金は貯らない。私なども其位な苦しみをして漸く斯ういふ身の上になつたのだ。と云はれて此人も多助のいふことを成程と感心したから、自分も何ぞ商ひをしようといふので、

これ 是から 漬物屋を初めた。すると 相應に 商ひもあるから、商ひ
 高の内より 貯めて置いて、これを 多助に 預けたのが 段々 積つて、
 二百両ばかりになつた。其頃の 百両二百両と云ふのは 大したも
 のだから、もう是で 国へ 歸つて 田地も 買へるし、家も 建てられる
 といふので、大いに 悦んで 多助に 相談の上、国へ 歸つた。国へ 歸
 つて 田地を 買ふ 約束をしたり、家を 建てる 木材を 山から 伐り出すや
 うにしたり、ちやんと 手筈を 付けて 江戸へ 歸つて 来ると、塩原
 多助が 死んでゐた。さア 大いに 驚いて、早速 多助の家へ行つ
 て、番頭に 掛合ふと、番頭は 狡い 奴だから、そんなものは お
 預り 申した 覚えは ござりませぬ、大旦那様 お亡れの 時お 遺言
 も ござりませぬから 上る 事は 出来ない、一体 お前さんは 何を 証

扨こに預あづけたと云いひなさるか、預あづけたものなら証しようこ拠なが無なければ
ならない。といふ取とつても付つけない挨拶あいさつ。其その時じ分ぶんは人間おが大お
様ほやうだから、金かねを預あづける通かよひ帳ちやうをこしらへて、一いち々く附つけては
置まいたが、その帳ちやうめん面めんは多助たすけの方ほうへ預あづけた儘ま国くにへ歸かへつたのを、
番頭ばんとうがちよろまかしてしまつたから、何なにも証しようこ拠なはない。さあ
其その人ひとは口く惜やしくつて耐たまらないから、預あづけたに違ちがひない、多助たすけさ
んさへるれば其その様やうなことを云いふ筈はずはないのだから、返かへしてくれ
と云いつても肯きかない。決して預あづかつた覚おぼえはない、と云いひ張はる。
預あづけた預あづからないの争あらしひになつた処ところが、出で入いりの車しや力りきや仕し事ごと師し
が多おほ勢ぜい集あつつて来きて、此こ奴いつは騙かた取りに違ちがひないと云いふので、ポカノ
、殴なぐつて表おもてへ突つき出したが、証しようこ拠ながないから表おもて向むきうつた
訴たへるこ

とが出来ない。頭へ疵を付けられて泣く／＼帰つたが、国では田
 地を買ひ、木材を伐り出す約束をして、手金まで打つてあるから、
 今更金が出来ないと云つて帰ることは出来ない。昔の人で了
 簡が狭いから、途方に暮れてすごくと宅へ帰り、女房に
 一伍一什を話し、此上は夫婦別れをして、七歳ばかりになる
 女の子を女房に預けて、国へ帰るより仕方がない。と云ふと、
 お前さんのやうな生地のないものは無い、預けたものを預からな
 いと云はれて、はいと云つて帰つて来ると云ふのは、何ういふ訳
 です、殊に頭へ疵を付けられて帰つて来るとは、余り生地が無さ
 すぎる、そんな生地のない人と連添つてゐるのは嫌だ、此子はお前
 さんの子だからお前さんが育てるが宜い、私はもつと気丈な人

のところへ縁かたづ付くから、といふ薄はくじやう情ないな言いひ分ぶん、此この女をんなは国くにから連つれて来きたのではない、江戸えどで持もつた女をんなか知しれない、それは判はつきりりわか然な分ならないが、何なにしろ薄はくじやう情をんなの女をんなだから亭ていしゆ主おもてを表おもてへ突つき出です。男をとこは怨をめしさうに宅うちの方ほうを睨にらんで、泣なくく向むかへ行ゆかうとすると、お父とつつアんエーと云いつて女をんなの子こが追おつ掛かけて来くるから、どうかお母つかさんの処ところへ帰かへつてくれ、お父とつつアんは無ないものと思おもつてくれと言いひ聞きかせて、泣なきながら帰かへる子この後うしろ姿すがたを見み送り、あゝ口く惜やしい、二代目たすけの多た助すけといふ奴やつは恐おそろしい奴やつだ、親おやぢ父ちちに金かねを預あづけた事ことを知しつてゐながら、預あづかつた覚おぼえはないと云いふのは酷ひどい奴やつだ、塩しほ原ばらの家いへへ草くさを生はやさずに置おくべきか、と云いつて吾あづま妻ばし橋はしからドんブりと身みを投なげた。さうすると円ゑん朝てうさん、その

死骸しがいが何どういふ潮時しほどきであつたか知らないが、流れしほばらくて塩原しほばら
 の前まへの棧橋さんばしへ着きいたさうだ。それを店みせの小僧こそうが見付みつけて、土左どざ
 衛門ゑもんが着ついてゐます土左衛門どざゑもんが着ついてゐますと云いつて騒さわぐ。若い
 衆しうがどれと云いつて行いつて見ると、どうも先刻店さつきみせへ来きて、番頭ばんとうさ
 んと争あらそひをして突出つぎだされた田舎者ゐなかもに似にてゐますといふから、ど
 れと云いつて番頭ばんとうが行いつて見ると、成程なるほど先刻店さつきみせへ来きた田舎者ゐなかも
 の土左衛門どざゑもんだから、悪人あくにんながらも宜よい心こころ持もちはしない、身みの
 毛慄けよだ立つたが、土左衛門どざゑもん突出つぎだしてしまへと云いふので、仕事師しごとしが手て
 鍵かぎを持もつて来きたり、転子かろこが長棹ながさを持もつて来きたりして突出つぎだすと、
 また其その棧橋さんばしへ戻もどつて来る、幾いくら突つ放ばなしても戻もどつて来るから、
 そんなこつてはいけないと云いふので、三人にんか掛かつて漸やうやく突出つぎだした

ところが、棧橋で車力が二人即死してしまひ、仕事師が一人
 気が違つてしまつたと云ふ騒ぎ。それから其れが祟りはしないか
 くといふ氣病みで、今いふ神経病とか何とか云ふのだらう
 が、二代目はそれを氣病みにして遂に氣が違つた。それから三代
 目が嫁を貰つたのは、名前は忘れたが、何でもお旗本のお嬢
 様とか何とかいふことだつた。お旗本のお嬢様が嫁に来
 るやうな身代になつたのだから、たいした身代になつた。す
 ると此の嫁を姉と番頭とで虐めたので、嫁は辛くて居られない
 から、実家へ帰ると、親父は昔氣質の武士だから、なか／＼肯
 かない、去られて来るやうな者は手打にしてしまふ、假令どんな
 事があらうとも、女は其の嫁した家を本當の家としなければな

らぬと云ふことを云ひ聞かして帰されたから、途方にくれて其の
 嫁が塩原の内井戸へ飛込んで幽霊に出るといふのが潰れ初め
 で、あの大きな家が潰れてしまつたが、何とこれは面白い怪
 談だらう」といふ話を聞いて、成程これは面白い話だ、こ
 れを種子にして面白い話をこしらへたいと思つたが、其の塩
 原多助といふ者が本所相生町に居たか居ないか、名さへ
 始めて聞いた位だから分らない。兎に角本所へ行つて探して見
 ようと思つて、是真翁の家を暇乞して是から直ぐに本所
 へ行きました。

さて是真翁の宅を暇乞して、直に本所へ行つて、少し
 懇意の人があつたから段々聞いて見ると、一二つ目の橋の側に金

なものや
 物屋さんが有るから、そこへ行つて聞いたら分るだらうと云ふ。
 それから其の金物屋さんで、名前は云へないが、是々の炭屋
 が有りましたかと聞くと、成程塩原多助といふ炭屋があつた
 さうだが、それは余程古いことだといふ。それでは塩原のこと
 を委しく知つてゐる人がありませうかと云つて聞いたところが、
 無いといふ。何処を捜しても分らない。其時六十九になる、仕
 事師の頭といふほどではないが、世話番ぐらゐの人に聞くと、私
 は塩原の家へ出入をしてゐたが、細かいことは知りませぬとい
 ふ。それでは塩原の寺は何処でせうと聞いたところが、浅草
 の森下の——たしか東陽寺といふ禅宗寺だといふことでご
 ざいますといふ。それから直に本所を出て吾妻橋を渡つて、

もりした森下へ行つて搜すと、今の八軒寺町に曹洞宗の東陽寺といふ寺があつた。門の所で車から下りてズツと這入ると、玄関の襖紙に円に十の字の標が付いてゐる。はてな、これは薩摩様の御寺ではないかと思ひました。門番の処で花を買つて十銭散財して、お墓を掃除して下さい、塩原多助の墓は此方でございますか、私は塩原の縁類の者でございますが、始めてまるつたので墓は知りませぬから、案内して下さいと云ふと、「へい畏りました」と云つて墓へ案内して掃除してくれましたから、墓の前に向つて私は縁類でも何でもないが、先祖代々と同向をしながら、只見ると、墓石を取巻いて戒名が彫つてある。第一に塩原多助と深く彫つてある。石塔の裏には新ら

類るいの方かたでございますか、愚僧ぐそうが当住たうぢうで……只今ただいま御回向ごゑかうを……

：「いえ、今日こんにちは抛ちよんないことどころで急いそぎますから、御回向ごゑかうは後あとで

なすつて下さい……塔婆たふばをお立てなすつて、どうぞ御回向ごゑかうを願ねがひ

ます」かしこま「畏かしこまりました」と茶ちやを入れて金米糖こんぺいたうか何なにかを出だします。

すると和をしやう尚しやうさんの手許てもとに長谷川町はせがはちやうの待合まちあひの梅廼屋うめのやの団扇うちはが

二本ほんあ有ありますから、はてな此この寺てらに梅廼屋うめのやの団扇うちはのあるのは何どう

いふ訳わけか、殊ことに塩原しほばらの墓はかにも梅廼屋うめのやの塔婆たふばが立たつて居をりました

から、何なにか訳わけのあることこと、思おもつて、「和をしやう尚しやうさん、こゝにある団う

扇ちはは長はせがはちやうの待合まちあひの梅廼屋うめのやの団扇うちはですか」「左様さやうです」

「梅廼屋うめのやは此方こちらの檀家だんかでございますか」「いえ檀家だんかといふ訳わけでは

ありませぬが、長ながい間あひだ塩原しほばらの附つけ届とけをしてゐる人は梅廼屋うめのやほ

かありませぬ、それで此の団扇があるのです」「それは何ういふ
 訳わけです」と聞くと、梅廼屋は五代目の塩原多助の女房にようぼうで、
 それそれが亭主ていしゆが亡なくなつてから、長谷川町へ梅廼屋といふ待合まちあひを
 出したのです」「へえーさうでございますか」それぢやア梅廼屋
 のお母ふくろに聞けば塩原しほばらの事は委くはしく分わかる。梅廼屋うめのやに聞くのは造作ぎこうさ
 もない事だ。といふのは梅廼屋うめのやは落語らくご社しゃ会かいの寄合茶屋よりあひぢややでござ
 いますから……「有難ありがたうございます、どうか御回向ごゑかうを願ねがひま
 す、又参詣またまゐりを致いたします」と云いつて、それから直すぐに浜町はまぢやう一丁ち
 目やうめの花屋敷はなやしきの相鉄あひてつといふ料理屋ちややへ行いつて、お膳ぜんを誂あつらへ、家
 の車うめのやをやつて、此この車まで直すぐに来てくれと云いつて梅廼屋うめのやを迎むかへにや
 りました。

うめのや
 梅廼屋は前にも申しました通り、落語家一統の寄合茶屋で、
 ことたうわたくしらくごか
 殊に当時私は落語家の頭取をして居りましたから、為になるお
 客と思ひもしまいが、早速其車さつそくそのくるまで来てくれました。「何う
 したんです、何か急なにきふの御用ですか」「いや、改まつてお聞き申し
 たいのだが、お前は塩原まへしほばらといふ炭問屋すみどんやへ嫁になつた事が有る
 さうだ」「いゝえ、炭問屋すみどんやは疾とうに潰つぶれて、お厩橋うまやばしへ来た
わたくしえんづ
 時私が縁付いたのです」「お前の御亭主まへごていしゆは」「秀三郎ひでらうと云つて
 五代目ごだいめでございます」「早く死んだのかえ」「へえ、少しき気が違ちが
 つて早く死にました」と云ふから、成程なるほど是真翁ぜしんをうの話とほの通り崇
 つたのだなと思ひあた当りました。「お前まへさんの所なに何か書物かきものはあ
 りませぬかえ——御先祖ごせんぞ塩原多助しほばらたすけの書類しよるゐか何か残なつてゐませ

ぬか」 「何も有りませぬ、少しは残つてゐた物も有りましたが、
 此前の火事で焼けましたから、書付類はありませぬが、御先
 祖様の着た黒羽二重に大きな轡の紋の附いた着物が一枚あります。
 それは二代目塩原が、大層良い身代になつて跡目相続を
 した時、お父さん、お前さんはもう是だけの身代になつたら、
 少しはさつぱりした着物をお召しなさるが宜い、何時までも木綿
 の筒ツぽでは可笑しいから、これを着て下さいと云つて、其の黒
 羽二重の着物を出したところが、こんな物を着るやうで、商
 人の身代が上るものかと云つて、一度も着たことは無かつた
 さうです。其の着物が残つて居ります。それから御先代の木
 像と過去帳が残つて居ります」 「それでは、ちよいとそれを

持つて来て貰ひたい」といふと、女将は直に車に乗つて行つて
 取つて来ました。其中に誂へた御飯が出来ましたから、御飯を
 食べて、其の過去帳を皆写してしまつた。其の過去帳の中に
 「塩原多助養父塩原覚右衛門、実父塩原覚右衛門」と同じ名前
 が書いてある。はてな、同じ名前は変だと思つたから、「お母さ
 ん、こゝに同じ名前があるが、是は何ういふ訳だらう」と聞くと、
 「それは私には分りませぬ、そんな事が書物にあつたと云ひま
 すけれども、私には分りませぬ」「初代の多助といふ人は上
 州の人ださうですが、さうかえ」「さうでございます、上
 州沼田の在だと云ふことでございます」「何処村といふことは
 分りませぬか」「どうも分りませぬ」「それぢや少し聞いたこと

が有るから、私は一つ沼田へ行つて見ようと思ふ。「沼田の親類もあの五代目が達者の時分は折々尋ねて来ましたが、亡つて後は音沙汰はありませぬ、もしお逢ひになつたら、どうか宜しく……」。「何といふ名前です」「お師匠さん、私は年を老つて物おぼえが悪くなつて、よく覚えて居りませぬが、何でも多の字の付く名前でしたが、忘れしました」「分りませぬか」「分りませぬ」どうも村名も分らず、名前も分らず、殆ど困りましたけれども、細かに尋ねたら知れぬ事もあるまいと、是から宅へ歸つて、直に旅立の支度を始めたから、宅の者は驚いて、何処へ行くといふ。少し理由があつて旅をすると云ふと、弟子や何かが一緒に行きたがるが、弟子では少し都合の悪いことがある。宅に酒

かるでんきち
 井伝吉といふ車を曳く男がある、このをとこ此男は力が九人力ある、
 なぜ九人力あるかといふと、大根河岸の親類の三周へ火事
てつだの手伝ひにやつたところが、一人で畳を一度に九枚持出したから、
にんりき九人力あると私が考へた。そ其の伝吉を呼んで、「時に私は今
んどじもつけ度下野から上州の方へ行くに就て、お前を供に連れて行か
おもしろうと思ふが、面白くも何ともない、ひどい山の中へ行くんだが、
ゆ行くかえ」それは有難い、——どんな山の中でも行きます、
わたししやうこく私の生国は越中の富山で、反魂丹売ですから、荷物にもつを
せお脊負つて、まだ薬の広まらない山の中ばかり売つて歩くのです、
またよくねんそさうして又翌年其の山の中を売つて歩くので、山の中は歩きつ
をけて居ります、又私は力がありますから、途中とちうで追剥おひはぎが五人や

六人出ても大丈夫でございませぬ、富山の薬屋は風呂敷を前で本
 当に結んでは居りませぬ、追剥にでも逢ふと、直に風呂敷の
 結び目がずつと抜けてしまつて、後へ荷物を投げ出し、直とヒ
 首を抜いて追剥と鬪ふくらゐでなければ、迎も薬屋は出来
 ませぬ、私が行けば大丈夫でございませぬ、御安心なさい」「さう
 かえ、足は大丈夫かえ」「足は大丈夫でございませぬ、車を引いて
 ゐる位でございませぬから」と云ふので、是から支度をしまして、
 両人で出かけましたが、何でも歩かなければ実地は履めませ
 ぬ。東京の内はうるさいから車に乗つて、千住掃部宿で
 車より下りて、是から上州沼田へ捜しに行きました。

(扱若林珪蔵筆記)

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2006年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

塩原多助旅日記

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>